

青森県警発表の強制わいせつ事件 容疑者逮捕報道に際して改めて思うこと

Broken Rainbow – japan

代表 岡田実穂

2024年3月14日、青森県警が強制わいせつの容疑で34歳男性を逮捕したことを発表し、県内の複数の報道機関が実名報道という形でこれを伝えています。本事件に関し Broken Rainbow – japan は、2023年10月に性暴力被害の告発を受けて以降、水面下での交渉を含め、本件容疑者が所属する団体であるトランスジェンダー・ジャパンに対して繰り返し、「適切・真摯な対応」を求めてきました¹。本件容疑者本人が自ら名乗り出て、自身のXアカウントで告発内容を非難するという展開になった際には、被害を訴えたご本人の反論を発表する場も提供しました²。しかし、当初から今日まで、私たちの役割はこの事件の詳細を語ることはありません。この文章の目的は、性暴力の告発があった場合の対応について、私たちの考えを伝えることにあります。

被害の告発からおよそ5か月の間、さまざまな場で多くの方がこの件について語る様子を見てきました。それは時に被害を告発した人を容赦なく非難し、攻撃するものでした。改めて思い知らされたのは、性暴力の被害を訴えるということがいかに被害当事者にとって精神的な負荷をもたらし、社会的に追い込んでいくものになるか、ということです。

被害事実を訴える声上がる度、「司法判断もされていないのに」「本当なら、警察に言っているはず」「訴えればいい」といった言葉が被害者に対し投げつけられています。冤罪被害者を生み出す加害者のように扱われることさえあります。そして被害届を出した結果、容疑者が逮捕されたとしても、次には「起訴されていない」と言われ、さらにその次には「有罪になっていない」と言われることもあります。事実、性暴力の起訴、そして有罪率は高いものではありません。特に、2023年の刑法改正以前の要件における起訴・有罪に関しては非常に高いハードルがあります。性暴力被害について誰かに相談する人の割合が、そもそもとても低いのです。そうした中でようやく声をあげた人がいても、その結果、心ない言葉を投げつけられ、傷つけられる様子を、多くの性暴力サバイバーたちが見ていることでしょう。やはり言えないと思い、そして、「司法判断すら受けていない自分の被害」を、どう受け入れたらいいのか分からないままに、自分を責め続けている人もいるだろうと思います。

¹ URL <https://x.com/BrokenRainbowJp/status/1717315424172536001?s=20>

² URL <https://x.com/BrokenRainbowJp/status/1721470775423848755?s=20>

密室で起こった性暴力被害について、警察などによる事実認定がなされていない状況にあって告発をどう扱うかの判断が難しいものであるという反応は、想像に難くありません。しかし、警察や裁判官でもない私たちだからこそ重要なことは、声をあげられる環境をつくることです。逆に、私たちがしてはいけないことがあります。それは、組織やコミュニティの利益やエゴのために沈黙を強いるようなこと、そのようなプレッシャーをかけることであり、私たちの態度・対応によって、「迷惑をかけてごめんね」と自責の念を抱かせてしまうこと、「声をあげなければよかった」と後悔させてしまうことです。

その意味で、トランスジェンダー・ジャパンの今回の告発に対する対応は、「適切・真摯な対応」とはかけ離れたものでした。「性暴力の根絶を追求する立場にある」と表明するばかりで、司法組織以外に事実認定はできないといいつつ、告発内容を「疑惑」と表現した上で説明責任を果たしたとし、決着を図ろうとしています³。さらにその一方で、私たちに対しては告発以降の一切の連絡をすることなく、本年はじめには、代理人弁護士を通して名誉毀損、経済的損害に関する謝罪を求める内容証明が送付されてきました。このような対応は、被害者はもとより、支援者にも不安や恐怖を抱かせ、結果として沈黙を強いる社会を助長していくことにつながります。沈黙を強いる社会は、加害者にとって都合の良い社会に直結してしまうということを、考えていただきたいと思っています。

本件告発が、性暴力被害にあい、被害を訴えた本人のみならず、苦しみを抱える多くの性暴力サバイバーにとっての二次的な被害を巻き起こすものにならないことを、心から願っていました。司法判断がどのようになるとしても、この「声をあげた結果」が、暴力を許さない社会のありかたを示すものであるように願っています。

最後になりますが、本件への意見が今後も各所で広まっていくだろうなかで、ここで問題となっている性暴力の問題をトランスジェンダーという属性に帰依する問題として語られることは、本件に直接関わる誰もが望んでいないことであるということを申し添えます。マイノリティであることへの嫌悪から差別や偏見に曝され、生きづらさを抱える人々がいます。そこでは、多くの暴力被害も発生していることが各所で発表されてきました。生きづらさを解消する、生きやすい社会をつくるために私たちは何ができるのか。これを共に考えていただければ幸いです。

2024年3月15日

³ URL <https://tgjp.jp/statement1228/>